

HAND in HAND

はんど・いん・はんど

平成元年10月7日
国立婦人教育会館
婦人教育情報センター

〔再婚時代〕

■8月12日から14日の2泊3日の夏合宿と、13日のハンド・イン・ハンド百号記念シンポジウムは無事終了しました。

■さて、9月7日に日本テレビ系で、円より子原作「再婚時代」が放映されました。これは去年の夏、東京新聞で連載したものがもとになっています。現在も、「続・再婚時代」を連載中ですが、今、なぜ「再婚時代」なのか。

■次の表を見てください。1年間の婚姻件数にみる再婚組の割りあいと、その組みあわせの比率を昭和40年と62年で比較したものです。

	再婚組	夫妻共再婚	夫再婚妻初婚	夫初婚妻再婚
S.40	11.2%	3.1%	5.5%	2.6%
S.62	17.8%	6.9%	6.1%	4.8%

再婚の増加は歴然。それも、夫婦共に再婚と、妻が再婚で夫は初婚のカップルが、再婚率を押しあげているのです。これは、女は二夫にまみえずという言葉が死語も同然となり、女性の再婚を恥とする風潮が小さくなったこと、適齢期の男性人口が多いこと、男性の性意識や結婚観が変化してきたこと、女性が被害者意識のかたまりのようになって離婚するケースが減ってきたことなどに起因しているように思います。もちろん、人生が80年と長くなり、やり直しがきくこと、子育て後の自分の人生が長いこと、余暇の時代に突入し、楽しく過ごせるパートナーへの希求が高まっていることも見逃せません。

■私の感触では、籍を入れていない「再婚」も増えているようです。次号に特集することになった6月の老後アンケートを見ても、「再婚したい」は16%なのに「再婚したくないが、パートナーは得たい」が35%にものぼりました。さて、あなたは再婚について考えることがありますか。(円より子)

海を渡る鳥は、波間を漂う流木に憩うという。離婚—それは旅の半ばの一つの出来事。新たな旅立ちをした女たちはいま手を取りあい、女であるがゆえの偏見と差別に向きあう。ハンド・イン・ハンドは生きやすい社会をめざし、支えあう女たちの流木である。

第101, 102合併号 400円 禁無断転載

【発行日】1989年10月1日

【発行所】現代家族問題研究所

東京都渋谷区神宮前3-33-2-202

〒150 電話03(402)7354、4385

【分室】0484-81-0496 児玉

【発行・編集人】円より子

【編集スタッフ】有賀佐知子

【印刷】鶴日出島

102

特集

ハンド・イン・ハンド 100号記念シンポジウム

百号記念シンポジウムと夏合宿の詳細をご報告します。

八月十三日(日)、国立婦人教育会館研修棟の大会議室で午前九時半から午後五時まで開かれました。

(実は朝の八時半から世話役は受付の準備・お茶の支度・前夜に作成したシンポジウムの看板を張るなどの作業のために集合したのですが、会場の豪華さにびっくり。天井の高い広々とした空間、ゆったりした坐り心地のいい椅子が二百脚あり。二ヶ国語の同時通訳のできる設備など、とにかく、えっ、こんな立派なところ?と誰もが喜ぶより先に驚いて……。しみじみ思いました。私たちが豪華なことにもお金にもホント縁のない生活をしているんだなって。でも、ささやかなことでこんなに喜べて幸せですよ。

というわけで、思いがけず、立派な会場で百号記念シンポジウムがとりおこなわれ、会場に負けず劣らず、中身のあるシンポジウムとなり、日帰りのつもりで来た人達が感動して続々と宿泊組に変更という事態となりました。

シンポジウムには、講師として金住典子弁護士、子供をひきとつ

た父親の立場として

さん、

両親の不和に悩んだ子供の立場として

さん、

親の離婚再婚を経験した立場として

さん、

さんを迎え、また分科会の進行役として村井美紀さん(日本社会事業大学講師)、内藤和美さん(昭和女子大助教授)が協力してくださいました。助言者には厚生省からお二人の方が来てくだされ、読売新聞と東京新聞・スウェーデンの新聞社それぞれの記事の方々も熱心に取材してくださいました。

では、八十名以上の参加を得たシンポジウムのハイライト部分を以下にご紹介します。

●目次●

●基調講演 金住典子弁護士

「離婚と家族のゆくえ」

P.2

●体験報告

「離婚後の共同監護」

P.8

●体験報告

「両親の家庭内離婚のはざままで」

P.12

●合宿中の研修や談話室での話及び、四十名もの子供たちの活動ぶりはP.2とP.7の最下段部をつかって報告します。

今回の合宿の特徴

☆宿泊申し込み者が百十六人と、これまでの最多人数でした。

☆どうしても百号記念シンポジウムに参加したい、でも旅費がないと知恵を絞った人は、何と青春切符で大阪から二千円でやってきたと言

い、みんなを感激させました。

☆ボランティアのお兄さんお姉さん総勢七名が準備期間から協力してくれ、三日間の合宿は全力あげて、四十名以上の子供たちの活動を見守り、応援し、共に遊んでくれました。

☆三歳から六十一歳まで、参加者の年齢層は大変幅広いものでした。

☆参加者の状況は、離婚組六割、別居組三割、同居組一割。子連れ参加六割、一人で参加四割というところ

です。



離婚と家族のゆくえ — 金住典子

(前略)

欧米ではかなり男女平等意識も強くなってきて、結婚というのは本当に愛し合っている間だけ結婚すべきだ、愛情がなくなったらやめるべきだ。その愛情がいつまでも持続する大事な要素として、男だから何をすべきだ、女だから何をすべきだというのではなくて、人間としてお互いに家事も分担する、育児もお互いに共同でやりましょうということであれば、いい人間的な家庭生活は営めないんだという意識がかなり高くなってきているんですね。日本ではその意識すらも当たり前になってきていな



いというあたりが問題だろうと思います。(中略)

やっぱり、シングルで生きるにせよ、結婚して生きるにせよ、社会全般の状況が良くなっていく——男女平等が実現して、社会保障が充実して、というふうになっていかないと、男と女の家庭における対等、平等性、あるいは愛情ということも、結局は絵にかいたもちになっっていく。これは世界中のデータからいえる事実だと思うんです。

ですから欧米の場合には、愛情がなくなったら離婚するのは当たり前、そして夫がそういう愛情関係を築き始めるような人格でなかったら別れましょう、ということになっていくといえるわけです。日本ではそこまでもまだまだいかない。ごく一部の共働き世代で、そういう離婚を選択していることも事実だと思います。しかしまだ、もともと壊れている結婚の中で、自分を大事にして主体性を確立しながら再出発を考えると人々のほうが、圧倒的に多いのではないかなというの、私自身の日本におけ

る離婚観です。そのことはその裏に、結婚を含めた家族の実態があると言えるわけです。(中略)

★

欧米では家族というものはどういう方向に進んでいるかといえますと、全く個人を単位とした個人原理に基づく家族という、本来あるべき方向に完全に意識が移行しているわけです。ですから、家庭とか家族を単位にものを考えるという場合、特に社会保障ですね、そういうものを考えるといった発想は、まさに家父長的な家族意識ですけれど、そういうものがなくなってきた。それに対して相変わらず日本は、夫婦というのは血縁でもなんでもないのに、個人単位ではなくて縦の血縁という感覚で家族を考える意識が強い。母子家庭でも、子供の個人、女性の個人という発想がないんですね。

数年前に、児童扶養手当法が改正になるということで、離婚母子家庭の女性たちが反対運動に立ち上がりました。離婚講座でも、『世紀を開く児童の権利保障』という本を急ぎよ作りました。日本の、特に子供に対する社会保障の貧しさが、どういうところから出ている

子供たちの活動

十二日(土)午後一時半、母親と別れて、美術工芸室に集合。自己紹介。学齢前の子供たち十四名はお姉さん二人と託児室へ。そこにはアニメのビデオや絵本もあれば、すべり台やオルガン、車や積木などのおもちゃがあります。子供たちは庭にでて砂場で遊んだり、草花を摘んだりも。

学齢以上の子供たちは、自己紹介のあと外でゲームをしてリラックステキなところで、お姉さんたちから、明日の料理のための話を聞いて、買物班と食器・調理器準備班に分かれます。

六十人分のランチを調理するため、当日では間にあわないと考え、前日からの買い出しとなったわけです。買ったものは調理室の大型冷蔵庫に保管。

十三日(日)学齢前の子供たちもフルーッポンチ作り。缶づめのフルーッとサイダーを混ぜるだけの簡単なものだったが「やりたい」とみんな積極的だったとか。

☆ベビーシッター役の馬上さんと柴さんの話から。

かというところ、やっぱり個人原理というものが人権ということを考えるときに確立していないということとその本の中でも明確にして、その視点からの諸問題をあきらかにしましたが、そこでも、離婚した母子家庭の自立自助を援助するという発想になるんです。それから生活保護法もそうなんです。個人単位ではないんです。あくまでも家族単位でもって最小限度の生活を援助するという発想なんですね。(中略)

日本の政府や法律が作ろうとしている家族というのは、あくまでも家父長的な家族というものを基本にしている。(中略)家族というものは素晴らしいものだ、家庭を守るのは女性の役割だ、というふうに宣伝しながら、実は女性を家庭の中に閉じ込めていくという政策が、日本では主流です。

欧米ではそうではなくて、社会保障のシステムは個人単位です。ですから、離婚しても、結婚しなくても、あるいは両親が離婚してもしなくても一切関係なく、子供に等しく子供の社会保障も確立されているというのが、人権国家と言われるところの主流になりつつあり

ます。全く理想どおりにいくかというところ、アメリカなんかでは巻き返しがあるようですけれど……。

それに比べれば、日本というのは個人という人権感覚が非常に弱いということが言えると思います。これからの家族ということを考えるときに、やはり私達は、個人がいかに自立して、シングルでも生きられる、そういう自由がなかったら結婚しても夫と良い人間関係、対等な人間関係は作れないということにはわかってきているわけです。これだけ離婚が増えてきているとわかってきているわけです。

★ 子供の立場で言っても、母親が本当に自立して生きられるような



社会にならなければ、結局は子供の側にもしわ寄せがいく。さっき円さんから、一昔前の世代の人達は、バンド以外のデーターでは老後は子供に頼るというイメージが強い、バンドの場合には、子供に頼るといふ人はほとんどいない、という報告がありました。そのくらい自立して生きたいと思う、そしていい人間関係を家族を選びたいと思う、そういう人達とそうでない人達の間には、大変な差があると思うんです。けれども、子供に頼らなければ生きていけないと思っている人達の方が、本当は不幸だと思えます。だから、安易に子供に頼ったりして、三世代同居を選んでる生き方をしている老人たちのほうに自殺が多いという形で出てくるわけです。

ですから、血縁関係があるから一緒に住まなくてはいけないという枠にとらわれて家族というものを形成していると、人間というのは男女関係なく本当に孤独で寂しくて触れ合いがないから、こんな不幸だったら自殺した方が良くとなってくる。それでも、離婚と同じようにこの家族を選びたくないから別の家族を選ぶよ、という

「みんな、なじむのが早くて、泣いたりぐずったりということも少なかった。同じ年齢の子が二人ずつというふうにしたせいか、一緒によく遊び、お母さんが研修室にいく時も、別れ難くて泣くという子いなかった。」

広い庭を散歩したが、トンボや蝶々やいろんな虫がいたりして、外にいくとみんなイキイキ。やっぱり自然とふれるのって子供には大切なことだと思った」

☆小学生中学生組は、本格的料理に挑戦。メニューは、ごはん、とうふとあげのみそ汁、ハンバーグにミックスベジタブル、きゅうりもみ、おしんこ。

簡単そんなものを選んだとはいえ、何しろ六十人分です。シンポジウムの午前の部が終ってお母さんたちが来たらすぐ食べられるようにと思うから、とにかく焦ってしまったそうです。

☆石橋・諏訪間・小川のお姉さん、山本・山田のお兄さんたちの話。「たまねぎをみじん切りする時はみんな泣きました」

「でも、けっこう家でやっているらしく、小学校一年生でもみじん切り



発想ができてくればいいんですけど、ところどころが老後というのは日本の場合には非常に貧しい。失業率も高齢者ほど高い。だから自立できない老人は、離婚だって選べない。老人が家族を選べるようになるためにも、男女共通の問題として自立できるような高齢化社会を作っていくか、とおそらくもっともって自殺率は増えるんじゃないか。日本の老人の自殺率の高さは世界でも有名ですね。こういったことが基本的なこととしていえると思います。

欧米の場合は、個人を単位にした家族、血縁ではなくて選択的な家族という発想をとっていて、その背景にはかなり男女平等というものが出てくるというところがある。あらゆる問題についての

家族意識、人権意識が違うために、

結婚中だけの共同親権ではなくて、離婚後の共同親権も当たり前になっ

てきているんですね。日本では相変わらず、家父長的な家族というものを温存しようということになっ

うんですね。

★

それから同棲い婚が非常に多くて、非嫡出子も増加している。ドイツとかスウェーデンの場合には、離婚率そのものも減少してきているんですね。なぜかといえば、結婚率も減少しているからなんです。法律上の結婚をする人が減ってくれば、離婚というものも減ってくるわけでしょう。そういう傾向がある。

ですから破綻主義というのが欧米の場合には当たり前になって、一九七〇年代から破綻主義離婚を採用する国が増えてきているわけです。そういった背景には、今のよう



の上手な子もいました」

「ゆっくり切っていたいのよ、という

と、きゅうりなど上手に切れるようになったり」

「ハンバーグは形をつくっても、焼くと二つか三つにわかれたりして、みんな悲戦苦闘していました」

「ハンバーグは家でつくった経験のある子多かった。しっかり、これはこうするのよなんてアドバイスしたり、指示したり。面倒見もいいし、リーダーシップのある子がけっこういる」

「合宿に初めて参加という子、多かったのに、すぐ打ちとけ、何年もつきあっているみたいに仲良くしている子多かった」

「誰とも打ちとけず、共同作業もせず、一人でふらふら別行動をとる子がいて気になった」

「その子はでもやっぱり気をひきたくて、いろいろないたずらをしていて、ひどい頭突きをされて、腹部が破裂したかと思うほど痛かったりしたけど、めげずにつきあった。虫に對してとても優しい気持を見せてくれたのでほっとした」

いろいろな子がいます。すぐには打ちとけない子。人と同じ作業はしたくない子。いたずらな子。



義だけが先行して、というのではない。スウェーデンでは、不貞とか離婚に伴う慰謝料請求を廃止しようという方向に法律が改正されてきているんです。結婚というのはお互いが対等であれば、どっちがいいとか悪いとかではない。一緒に暮らさないことが幸せなんだから、だったら慰謝料とかどっちの責任とか言わずに別れようじゃないか。法律というものは、結婚や離婚について中立であるべきだ、という考えがスウェーデンなどでは主流になってきている。結婚、離婚というものは個人のプライバシーなんんだ、というふうにとらえ

られたつあるわけです。

でもそこまでいくには、日本と違って女性も男性と対等に仕事ができる、いろんなポストが得られる、人生を自分の意欲で選んでいけるという社会状況ができて初めて、そのような方向も出てくるわけですから、そういう社会的状況も作らないで、ただ勝手にしろという形では困るわけです。

欧米では裁判離婚が中心だから、破綻主義という問題が出てくるわけですけど、日本では協議離婚が裁判離婚より圧倒的に多いわけです。そうすると日本の場合には、協議離婚が多いんだけど、その実態は結局は女の側の子供もしわ寄せされる、経済的にもしわ寄せされる。そして慰謝料も払わない、財産分与も払わない、養育費も払わない、本当に男にとって都合のいい離婚がまかり通っているという実態があるわけです。したがって、男の人は経済的にも社会的にも都合がよくて、離婚の場合にも男に都合がいいという男性天国のなかで、本当に優しい男が育つわけがないんです。やっぱり優しい人間になるには、思いやりですよね。思いやりがどこでできる



かといったら、いいことと悪いことのけじめが日常茶飯事にできる人格が育てられなければいけないわけです。だから、自分は金を持っているんだとか、男だから偉いんだという発想で人間関係を作ろうと思ったって、できるわけがないんです。

けれども日本の男の状況というのは、男なんだからということでもう、結婚してもよろしくお願ひしますと頭を下げる必要はないし、男であれば再婚でもいくらでも嫁さんのきてはあるよ、というふうな非常にごう慢な意識を持たされている場合が多いという状況があると思うんです。例えば、幼女誘拐殺人事件の犯人の幼さは、日本の男性中心の社会が作り出している男の貧しさの象徴であると私は思うんです。貧しさだけならいいんだけど、殺人、あるいは日常的には強かんという形で常に女たちが卑しめられて、殺されている

攻撃的な子……それでいいのです。でも、やられた子はやりかえします。ドキッとするような復讐戦もありました。最後までほとんど自己主張もせず、楽しそうな顔もせず帰った子もいます。

会場が会場だけに(文部省の管轄なのです)。そして、四十名もの子供は受け入れられないと一週間前に宣告され、必死で頼みこんだ経緯もあります)、いたずらが過ぎるのは困る、何か事故でもあってはと、大人の都合が優先するから、どうしても子供たちに野放図にはさせられません。

そんなこんなで、もう少し長く、さらに他の場所でも子供たちと接することができた、輪の中に入らなかった子供たちや何かをいかけた子供たちの心がのぞけるのにと残念です。せめて毎回の合宿に参加してくれればいいと私たちは思うのですが、そういう気にかかる子供たちに限って一回きりの参加にながちで、私たちの許容度の小ささにも関わることで反省しています。

ともあれ、全体としては子供にも楽しい合宿だったのです。

料理のあとは母と子とそろって

という状況をも作り出しているわけです。

そういうことを考えると、離婚で女性たちがそこから逃れて自立するという状況を、私達はよかった、よかったといって励ましていくだけでは足りなくて、日本の状況全体を変えていって、女性が人間的な生き方を選べる、本当に人間として自立できるような社会を作っていく。それには性別役割分業というのを廃止して、女性も男性も自立して食べていけるような世の中を作っていくしかないと思うんです。そういう状況を一日も早く、みんなの手で作っていくということがないと、老後は夫と暮らしたくない、再婚も全然考えていないという、離婚した女性たちが離婚後の人生について、全く男を嫌って男に信頼を寄せられないような状況というのは、本当にいびつであると思うんです。やはり、男と女が愛し合える人間どうしとして生まれた人間のすてきさを、大人たちが見せていかななくて子供が幸せになれるわけはないんですよね。子供達も、お父さん、お母さんから愛し合うことの大切さを学んで、だからこそ生きていくこと

はすてきなんだという世の中にしていけないと、離婚して一生懸命自立して自分を大事にしようと思っただけでいるお母さんに育てられた子供が、実はまた男不信を植え付けられたというのでは、やっぱり幸せな家族をそこで作っていく能力が生まれてくることにはならないんじゃないかと、私は思います。

★

離婚を通して、個人を大切にすること、自分を大切にすること、そして大切にしていくことができる人々が増えていくことによって、結婚、あるいは家族というものが何かが大事なのかということがあきらかにされていく、そういうプロセスであると思うんです。

でも今度はどうプロセスだけではなくて、個人の小さな努力ではとてもまにあわないんだということに目を向けて、もっともっと私達が豊かに家族を選んでいけるような社会状況を作る方向に、大きな視野で取り組んでいかないと、離婚して踏み出したんだけど、なんと先の人生は頭打ちかという状況に離婚した女性たちがいつまでもいるとしたら、これは本当の自

立した離婚、あるいは自分を大事にする生き方を選び取ったということにならないわけです。

ですから、前の悲惨な結婚を持続するよりは離婚の方がよかったかもしれないけれど、でも離婚した女性たちがもっと豊かに生きられるような社会を作らないと、自分も不幸だし、子供達にも希望を与えられないのではないかとというふうに、私は思います。



食事をし(中に、ハンバーグがたりないといわれ、外で食べたお母さん方がいました。本当は十分あったのに、情報のいき違いで、申し分ないことをしました)、午後は、名古屋の会員で、性教育の実践で受賞したこともある小学校教員の榎原真知子さんの指導で「みんなが生まれた時」の話を。その後、感想文や絵を書く時間をとりました。

☆子供たちの作文から。

「お母さん、私がおなかにいた時は男の子だと思ったと言いましたね。怒りますよ!このとおり私はきちんと女の子です。それでも本当の親ですか?でも私はお母さんのこと大好き。だから許しちゃいます」(小四)

「私は今日、お母さんが分科会に行っている時、工芸室でみんなと休んでいたら、名古屋から来た先生が、赤ちゃんがおなかにいた時の話をしてくれました。私はそれを聞いて自分が赤ちゃんだった時のことをもっと聞きたくなりました。それからお母さんが赤ちゃんだった時のことが知りたくなりました。だから今度聞かせてほしいと思います。(小三)

離婚後の共同監護

妻からの離婚宣言・そして家出

離婚の手続きが終わりまして、一年にもなっていない。その意味では、こういった話をしていくのが本当にふさわしいのかと思いましたが、自分自身の気持ちを人に発表することで、自分を整理したいと思っています。

私は、現在、地方公務員をしていまして、三十三歳です。今、子供が四歳です。結婚して四年半たった八七年の秋頃から、妻が直接私に離婚をしたいというようになりました。その時点で十年近い付き合いがたっていました、年齢も（妻のほうが）低かったし、知り合った当初からの関係というのが、私がいりいろと指導したりアドバイスしたりして、自分の好きな色を彼女につけていったという関係がずっと続いてきました。それがおそらく、結婚してからの彼女自身の成長にとって目ざわりなものになっていったんだらうなど、今思っていますけれども、その時点では晴天の霹靂、非常にあせった状態に陥りました。

仕事も、土曜の夜、それから日曜、平日も夜間の勤務が続いている中でそういった事態がでてきて、最初の頃、大変苦しい思いが続きました。自分自身も本真にどうしていいかわからない。自分の両親や彼女の両親には、もしかしら何とかなるのではないかと思いい、じっと黙ったままで、残業をやめて帰ってくる状態が三か月から四か月続き、気持ちも滅入った状態が続きました。

彼女の好きになった人とも、その間に何回も会ったりしてはいたんですが、自分の考え方としては、まず、人と人との関係なんだから、お互いにわかりあえる部分はわかりあ、わかりあえない部分はわかりあわないで解決したいという気持ちはずっとありました。もちろんせっぱつまった状況の中で、相手の職場に電話をして全部ばらしてやれとか、相手の親に電話をしてやれとか、今から思えば未熟な気持ちもわき上がってきたんですけれど、結局そういうことはせずに、翌年の四月に彼女が家を出るという形で進んでいきました。

その間、彼女の気持ちとしては、彼女自身も混乱している中で、子供は非常に大切だ、しかし彼も大切だ、僕のことははっきり言って頭にせんせんないという寂しい状態が続きました。僕のことは父親としては信頼しているという言葉を残しまして、家を出たわけです。

その時点で僕の気持ちというのは、十年間やってきてわかりあえる部分が非常に多かったし、最後のほうは、あんなに優しくなった彼女が、頭にきて包丁を部屋の中にぽんぽん放ったりするものすごい彼女の怒りをみて、僕に対する信頼感は全くなくなってしまったというのを見てすぐ感じるわけです。自分だって昔ほどは彼女を愛していない部分が多かったと思うのですが、そういうことに對する寂しさというのは何とかしたい。また、子供の前ではそういったものは最大限見せませんでしたので、別れても何とかうまくやっていってほしい。そのへんのところは、理屈で解決しようという面が私の中にありまして、円さんの書いた本は、その時期にかなり読みあさりました。

子供をめぐる夫と妻の立場

八八年の四月の時点で、車で五分くらいのところに彼女がアパートを借りて、週に二回ずつくらいは保育園に迎えに行き、子供が安定するまでは、私が残業して帰ってくるまで面倒を見てから帰るということで彼女も納得して、そういう形ですすめたわけです。ところが、すぐ翌月に保育園の園長先生から呼び出しがありまして、子供が非常に不安定になっている、と……。かなり喜怒哀楽の激しい、表情の豊かな子だったのが、無表情になったり、あるいは友達との輪の中に入っていない、新しい学年のクラスの先生になじめないといったことが見た目にもわかりました。ただ私は、母親が（家を出たことがその理由ではないと思っていたんですが、じゃあ何が理由かということとは園の先生たちにも自信を持って説明できない。また、彼女との関係も、感情的なこじれがずっと残っていた。そんななかで、去年の夏休みまでは（母親）と会うのをやめ、ただ様子は電話で伝えるようにしてきました。

去年の夏、今年のお正月と、彼

女ではなくて私が、彼女の茨城の実家に子供を連れて行って、一日泊まって帰って来て、一週間ぐらいして（子供を）引き取りに行くということをやっていました。

その間、彼女自身も相当揺れ動いたりしているんですが、結局彼女も自分のアパートの中でひとりて暮らして行くことができなくなってきた、彼のアパートと半分半分泊まったりということが続いたりしていました。

結局、去年の十二月に離婚手続きをしました。今から思うと、ちょうどそのころまで、彼女に対するいろいろな感情がふきだしていたように思います。去年の十二月に離婚した時点で、ブッシュホンの電話を入れまして、私の職場と私の実家、彼女の実家と彼女のアパート（この時点では彼のアパートですが）それぞれに、子供が電話したい時にボタンを押すと電話できる状態にしました。ところが、私のほうの仕事もどんどん忙しくなる一方で、その時点では仕事を捨ててまでという気持ちは全くありませんでした。その中で、かなり離れたところに住んでいた両親が、ちょうど今持っている分譲住

宅を売って、もう少し小さな管理のしやすいマンションを探していたんですが、たまたま近くのマンションに当たりまして引越してくるようになりました。

そのころから、彼女自身のなかに、うちの両親が近づいてきて子供と会えなくなるのではないかと不安もでてきました。そういう中で今年の春ごろにかけて、これからどうしていこうという話をまた頻繁にするようになって、この四月以降、月に二回から週に一回くらい、私の家のほうに保育園に迎えに行った後に直接来るようなことをしています。また、それにかかわりなく月に一回くらいは遊園地に行ったり、時々私も含めて三人でピクニックへ行ったりということもしています。

今年の六月になりました、彼女が近くのアパートを引き払って車で三十分の彼のアパートに同居しました。二人はまだ、結婚するとかしないとかいう話はしてないそうですけれども、彼女が私の家にきて私が帰るまで（子供の）面倒をうちでみるということが、心の負担になってきているということ伝えてきました。その間、家に

いる彼のことをすごく気にしてる、落ち着かない子供とも自然に接しられないということ聞きまして、ついこの間、八月に入ってから三人で会いました。

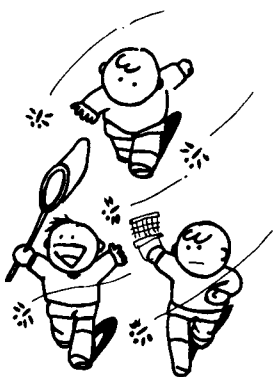
私の気持ちとしては、うちの子供が彼のところに行くのがいやだという感情的なものがずっとありまして、とにかく彼とも話せる関係になりたいんだよということを強く言いました。これからそういうふうにしていかなければいけないんだから、彼と会って話したいということであってもらいました。おそらくこれから、彼の家のほうへ子供が行って三人で過ごす時間が今後できてると思います。

それから、養育費とか慰謝料ですが、私の場合は、そういったものは結果的にはしませんでした。当初、非常に感情的になった時点で調停とか公正証書の問題とか、自分の仕事を犠牲にした何カ月間に対する慰謝料のことを本気で考えて、彼に直接会ったり電話で怒鳴りつけたり、かなり脅迫まがいのことをやったことがあります、一年近く。その中で彼がノイローゼみたいになっていきまして、体にな調をきたし仕事も休むようにな

ってきました。それを聞いて、自分の中でもすごいやなものを感しました。それがちょうど去年の十二月の離婚の時点だったんですけれども、そのときを境にそうだった気持ちが無くなっていったなあとなっていて思います。

毎月十五日が彼女の給料日で、その後会ったときに月四万円ずつ彼女からいただいています。

家は頭金二百五十万で、借金二千万して、借金をかかえたまま名義はそのままになっています。それについては、お互いまだ話し合いをしていません。彼女は口ではいらぬと言っています。まだそういった気持ちでいると思っています。



今後、こういった問題が出てくるにせよ、裁判所を通したり、公証人役場を通したりという関係は、今のところ一切していません。

怒りと羞恥とみじめさの中で

こういった経過の中で自分自身で一番困ったことというのは、やはり感情的にどんどん沸き起こってくる怒りだとか、(妻を)他の男

に取られた恥ずかしさだとか、あるいは自分の人生はこれで終わりだというみじめさ、家庭をめちゃめちゃにしゃがって、という、そういったものが、あっちこっちでふきだしてきて、どうしようもない、コントロールできない自分がありました。

子供の調子のいいときはいいんですけれど、ちょっと具合が悪くなると、たまにおじいちゃん、おばあちゃんに面倒を見てもらったとしても、「おじいちゃん、おばあちゃんの見方が悪い」と自分の親に当たってしまった、あるいは彼女がうちに来て子供の面倒を見ていても、私がうちに帰ってくると彼女がそくさと帰ってしまうということがあると、その態度がすごく気に入らなくて、玄関先でけんかになって子供が泣き出し

たりということが、頻繁にありました。こんなことをしていたら会っていてもしょうがないんじゃないか、これじゃもう会わないほうがいいと言った、母親が子供に「ごめんね」と泣いて別れたりということがあって、これじゃあ別れた意味がないなあとか、いろいろ考えたりました。

ただ、そういった感情的なものは外に出していかないといつまでもこもってしまうんだな、ということに自分では気づいたんです。というのは、私の両親は、「うちの嫁はすごくよくしてやったのに、ああいうやり方をされて」今でも(気持ち)「こもっているんですね」「私は一生それを持って生きていくんだから」と言うくせに、「怒っているなら会いに行つてぶんなぐつてやればいいじゃないか」と言っても、それができないんです。うちの親は。

「自分で怒っているんだから自分で責任持ちなさい」と言ってもそれができない。そのくせ、子供が母親と会っているときは、すごいイライラして、私に当たったり今でもします。

そういうのを見ていて、感情とというのは責任持って処理してしま

えば次のレベルにいくのではないかと、自分の持った怒りはあちこちで逆に徹底的に出すようにしました。彼に対しても怒ったり、自分が苦しいときには俺は今苦しいんだということを、彼にも伝えたり彼女にも伝えたりということを何回かしていくうちに、そういったものがだんだん薄れていく自分に気がきました。

子供は何も言わなくても気がつくもので、ある日突然、「お父さんとお母さんは一緒に住めなくなっちゃったんだよね」と言ったことがあるんですけれど、そのときに、「そうなんだよ」という説明だけじゃなくて、お父さんもとつてもつらいということを子供にも伝えるようにしました。大人子供も関係なく、とにかく自分の感情をどんなにきだすことに、去年一年間を費やしたというふうに思います。

それをしていく過程で、子供を会わずことで彼女の人生をまだコントロールしようとしている自分もあったなと思います。それは、彼女と彼はまだ彼の両親に言えない状態で一緒に暮らしているんだ状態でも、親にも言えないような関係のところは子供を行かせる

ことなんてできない、とにかく別れて一人で自立して暮らしてほしい、という思いが自分の中に去年ありましたので、「もっとしっかり子供のために生きなければだめじゃないか」と言いながら、要するに彼と彼女の関係をすすめるか、つぶしちゃおうかという操作を自分の中でしていました。

人から指摘されて、おっと思ひまして、そこから卒業するまでには相当かかりましたけれども、現在、彼とも何度も会って、「両親に言える言えないということが、彼と彼女の関係を規定しているんじゃないんだというふうに、今は思えるようになりました。

それから、私が行ったカウンセリングの先生に、やっぱり母親は出産のときやその前からその緒でつながっているからどんなに苦しくても、自分で子供を育てることを受けおうんだよ、それが母性なんだよと言われまして、理屈では頭の中にそういうことはなかったんですが、実際に子供を見ていて、そうかなあと思ったりました。少なくとも子供にとって、大人の女の人が近くにいたことが大事だということに気がきました。

人はいろんなチャ、チャを入れました。近所に別れた後もう一度元の夫と再婚した人がいて、絶対もう一回一緒にいるべきだとか、あるいは新しいガールフレンドに近づけるようにしなさいとか、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしなさいとか、いろいろな言うんですが、大人の女性が近くにいないという不安を持ちながら、今はどこらにも動かずにやっています。さっき、感情を解放したという話をしましたが、やっぱり子供の前では自分は正直であらなければいけないとすれば、誰の前でも正直であらなければいけないと思いました。最初は自分の一番親しい友人から、徐々に、自分のつらいこと、悲しいことも含めて、職場の中でも平気で話せるようになっていって、それをやってみました。単に、離婚したよとかそういうことではなくて、夜寝るときに、横に誰もいなくて寂しいだよな、肩をもんでやりたくてももんでやる人もいない、と言って男性や女性に肩をもんでやったり、ときにはもんでもらったりして、自分の気持ちそのものを職場でも解放していくというのを同時にやってみました。

そういう中で、結婚したときに彼女に対して自分の気持ちをはなかなか解放してなかったなあ、それがすごく機械的な人間関係だったのかなあとということにも気がつきました。離婚して子供と一緒に暮らし続けているということも含めて（心を）開いていくと、逆に新しい友達とかがとつてもたくさんできてきて、ああ、これはすごく建設的な生きかたなんだなあと思い、彼女とは家を飛び出す形で別れたけれども、そのおかげで自分は別の人間関係ができたなあと思えるようになってきて、そのへんでも相手に対する感情的なものが動いていったんだと思います。



再婚と子供の将来

現在抱えている課題としては、お互いに話し合えないでいる自分の両親と彼女との関係に対して、私としてとってもらいたいものを感じています。具体的には、私の前では（子供は）お母さんの話をいくらでもするんですが、おじいちゃん、おばあちゃんの家に行くと、私との間でも自分の母親の話をするのはばかる。明日お母さんがくるといいうのを知っていて、それがうれしくてもおじいちゃん、おばあちゃんの前では言えない子供を見てみると、とってもつらいんですね。やっぱり大人同士が自分の感情に責任を持って生きていかないと、結局犠牲になるのは子供なんだろうな、と思います。

両方にたとえ会えたとしても、その場はうれしくても、自分の祖母や母親や父親が気持ちが悪く感じないということに子供は気づくと思うし、そういうたかたちで育って行く過程で、うちの子は四歳ですから、どんどん気持ちが分裂していくんじゃないかなあ、という心配はあります。

再婚とか、今後の自分の家族と

いったことに對しては、私は二人兄弟でしたので、子供がたくさんいる家庭で過ごしたいという夢がありました。実際には今子供と二人で住んでいるし、一年半たって自分のエネルギーのレベルもあがってきました。一時は本当に落ち込んでいたんですけれども、今はいろんな意味で活発に行動したり、交友関係も作れるようになってきました。すぐ再婚したいとか、家庭を作りたいという気持ちはありません。あるいは再婚のために相手を探そうという気持ちもありません。もしかしたらそうなるかもしれないな、という予感はありませんが、今の自分としてはもっといろんな人ときあつて、いろんな経験をしたいということでは揺れ動いていまして、それ以上は今のところ考えていません。自分がしたいようにやっていくなかで一番いいほうにいくんだろな、という気がします。

それから一つの予感として、おそらく思春期のころ、うちの子供はもっと母親に近付いていくんだろうと思います。やはり、幼いころ無条件で受け入れざるを得なかった経験というのは、自分の力で



判断してこうとしたときに、親がやってきたことと反対方向を向いていくんだらうと思います。その意味では、もしかしたらしばらく母親と暮らしてみようと言いだすかもしれない。そのときに自分がみじめな思いをしないで生きていくにはどうしたらいいか。彼女と暮らすようになって私も忌憚なく暮らせる関係というのは、今私と暮らしているときに作っていかなくてはいいんだらうなあ、というふうに思っています。

私は、青年教室などをずっともっていましたが、高校生とか二十歳前後の人達とかなり話をしています。自分があからさまにしていくと、実は私は父子家庭の娘です、とかいう話を聞きます。その中

で自分のところが父子家庭、母子家庭だったから、いい家庭、円満な普通の家庭をつくるんだ、という潜在意識のある人と、逆に自信がないのでいつまでもひとりてくらししていく人と、十代後半から二十代にかけてそういう二つの心理状態があるんだなあ、というのを見てきました。自分の娘がどちらかのパターンに近づいていくかもしれない。そういうリスクを負って生きていくんだらうと思います。

ただ、それは自分の娘の運命だし、運命は運命として受け入れて、僕もしっかり生きていくから、その中で自分で考えてやってもらうしかないんだなあ、というふうに思っています。

両親の家庭内離婚のはざまで

父親の顔色を見て過した日々

家庭内離婚というのが林郁さんの本で随分一般的になりました。今回この話をしてほしいというので、林さんの本を読んでみたんですが、そうすると、うちの場合とは随分違う。それで、家庭内離婚の定義というものから話したいと思います。

林さんの本の中では、たとえば高齢者で夫とは口もききたくないから、上に夫が住んで下に妻が住んで、法的には離婚していないんだけど生活は全く別とか、夫が北海道に単身赴任して愛人が夫の世話をしているのを知っているんだけど、離婚して家がなくなるのはいやだから離婚しないというとか、そういうような形で、家庭内離婚が書かれています。私の家の場合はどうかというと、父親の母親に対する暴力がひどくて、殴る、蹴るは当たり前、というのが年に一回か二回あった。経済的な面では、父親は自営業なんですけれど、自転車操業みたいな感じでやっていて、非常に経済的にも

不安定だった。それで母親との関係がどうなっていくかというと、経済的にうまくいかないときに父親に愛人ができて、その愛人のことを母親が言って、母親が殴られて、ということを繰り返している感じでした。

この話をしてほしいと言われて、いいですよと引き受けたんですが、でもずっとくさいものにふたをしてきたんですね。私は一人で東京に住んでいて、実家は地方にあるもんですから、見なくてもよいというか、考えたくもないというか……。ヒステリックな生き方であるかもしれないけれど、私はずっとシングルでいこうと思ってますし、私の人との関係性というのは、向かい合って、例えば何かを見て同じように感動するとか、「それは違う」と言い合える。何か一つのものを見て、違うと言いつつその価値観が違ったとしてもわかりあえる関係を、女友達にも男友達にも求めてきたので、それは反動かもしれないですが、うちのことはもういいですよ。私の中で男と女の関係は、性別役割分

担をなくすというところからきている。けど実際、頭の中ではそれでも母親と父親の関係を見ると、もうちょっと気づく人だったら、簡単に一歩ふみだせるのに、という状況の中に大好きな母がいるんですね。

ちょっと家のことを話してみたいと思います。私が両親と暮らしていた二十歳のころまでの私の中の概念は、私は不幸な家の子だと思っていたんですね。お母さんとお父さんが不仲である、子供のころはそれしか見えなかったで、母親が顔をほらして、フライパンで殴られて目から血を出すとか、服を裁ちばさみで切られて、というようなものをおぼろげな記憶ながら結構いっぱいもっています。それが私の中でどういうふうに培われていくかというと、一人で東京に出てきて、私を誰も威嚇したりする人はいないのに、例えば電車の中で男が酔っ払って大きな声を出しているとかわいと感じるんですね。恐怖感がすごくあるんですね。それは何からきているかというと、私の幼いころの記憶からきている。こんなことで、男女性別役割をなくそうなんて旗印を

上げている私はびくびくしてはいけないなんて思うんだけど、すっとかえっていくところが、男はこわい、というところなんですよ。今もそれは消えてはいないと思います。

で、母親が殴られていないときに、私とか十歳離れた妹は、どういふふうな態度をとっていたかというと、例えば父親が帰ってきて玄関の戸を開ける音を聞いて「ああ、今日は機嫌が悪いから、さっさと自分の部屋にいったって勉強しているふりをしようかな」とか、「今日は機嫌がいいから居間にいて、ちょっと父親とも話してみようかな」とか……。父親の機嫌の悪い悪いで、自分の行動を決めていたところがありました。それは、高校三年生のときに、進路のことでもめて私が父親に殴られるということがあったんですが、その時に母親は、「本当は思ってたけどおとうちゃんが白って言ったら、心の中でどう思っても白っていつきかな」という言葉を言っていた人です。それから、家族みんなで父親の機嫌をさかなでしないように、楽しい家族をよそおっていたんですね。それがずっと私の中で負担にな

っていたのと同時に、どう思ったかというところ、「私が経済力さえ持てば、母親を父親から引き離して一緒に住もう」と思っていたんです。とにかく、白いものを見たらやっぱり白って言いたいというのが、だめだと言われるとよけいに心の中で意志が強くなってきて、もう父親とは一緒にいられないと、二十歳になったときに東京に出てきたんです。

それで、家庭内離婚じゃないというの、母親が父親に対してへりくだっている、そういうことを母親があえてしているんじゃないかと、やりたいみたいないところもあるんですね。林郁さんのいう家庭内離婚というのは、自分の意志によって家庭内で離婚を成立させている。でも私の場合は、何とか父親の意に添おうとしている母親がいて家族がいるわけだから、ちょっと家庭内離婚とは違うと思うんです。

両親が不仲でいる状態で一緒に暮らしているのが長いと、子供にとって弊害が出てくると思うのは、ねじまげられちゃうというか……男に対する信頼感がはつきり言っておりません。それは、今の社会

状況を含めてのことなんです。やはり私の中の個人的な体験が多くて、不幸な家の子供だと思いつているから、こんなふうにいる母親と父親は仲が悪いんだけど、あなたはそれでも私のことを友達だと思ってくれる？ っていうふうに、友達関係を積んでいくんですね。不幸なうちであつても、個人という単位がしっかりしていれば、私は私なんだから私を見てくれればいいでしょ、って思えるんだけど、不仲な父と母の中で暮らしていた場合には、どうも自分に対しての自信がなくなってくるんですね。人間関係ができていないようなところで生活している私であるところがあるんじゃないのか、という感じで自分自身を見ていってしまう。そこらへんが、両親が不仲でいたところで育ってきた弊害だと思っています。



自立できない母親

次に母親の家出なんです、私が東京に住んでからの話です。父親の愛人の発覚と事業の倒産の危機が重なって、母親が家出をすることを決心しました。前々から何度か母は家出をしているんですけど、行き先が母方の親類の家だとか、血縁関係をまわりまわって最後は家に帰ってくるという感じだったのが、まったくだれにも告げずに出て行ってしまったんですね。これは本物だな、やっと母親と一緒に暮らすという私が考えていたことができるかなと思って、うれしかったんですね。だって、たたかれて殴られている時間よりも、同じ残された時間が少なかつたら、たとえ四畳半であろうとなんであろうと、一人生きていくほうが、自立していくほうが楽だと、私自身の人生の中でも思っているから、やっと母親もそこに気づいたんだとうれしかった。

そんな中で、妹が父親に包丁を突き付けられるということがありました。母親は何も告げずに出て、妹は一人家に残っていましたから、妹なら母の居場所を知っているん



じゃないかというんで、おどす形で包丁を突き付けられたんです。そのときにびっくりしたのは、私は東京にいてすぐに駆けつけてやれないという状況の中で、周りがどういうふうに見たかという、すごく男系社会だと思っただけですけど、父親の味方をするんですね。「あんたのうちのとおちゃんは、そういうところまで追い込まれていてかわいそうだなあ」というふうな親戚のおじさんがみたり……。それで、母親も家出をしていては話にならないからということで、親族会議がもたれるんですけど、結局のところ、経済的なことと、母親の一人で行っていききたいという意志のなさ——高校一年だった妹が、大学に行きたい、大学に行く

んだったら奨学金をもらうとか夜間に行くとか何らかの方法があると思うんですけど、大学に行かせてやりたいと思うと、母親に言わせると、私が父親のところに戻らなければ仕方がない、と……。でもこれは、本当に経済的な面だけかというところでもない。そこらへんで私はびっくりかえってしまった。やっと母親が気づいて、一人で生きていくほうが楽だなあと、思っただけで行動してくれたのに、結局はもどってしまった。

父と母は、二軒ある家の一軒ずつに別々に住むというのを三カ月していたんですけど、父親が、ご飯を作るなりなんの生活も大変だから戻って来てほしい、というところで戻ったんです。けれども、子供の立場から言えば、「じゃあ、妹が実の父親に包丁を突き付けられたことは何だったの?」やっとな母親が自立したと思うから、待ってましたとばかりのいきおいで、職業訓練所のこととかいろいろなアドバイスを、母親に対してすると、母親はどういうふうに受けたかというところ、「私の人生は私のものなんだから自由にさせてちょうだい」と言ったんですね。

両親の離婚ということをかかえる子供というのは、常に間接的な立場であるから、自分の問題であるけれども、影響はものすごく受けているけれども、ふりまわされているけれども、わっといういきおいで自立をふきこんだって、いくら観念でそのほうがいいんだと思っても、人間は行動できないんだな、ということを経験から私が学んだことです。それでいて、母親と私の問題は終わったかというところじゃないんですね。一つの家族という単位で考えれば、まだ続いていますし、母親が自立できないからといって、情けないなあと思っても、面と向かって口に出して言っちゃいけないんだなあと思います。

母親が家出したのは、二年ぐらい前なんですけれど、今、依然として、母親は父親と暮らしています。すごくはがゆく思ったり、情けなく思ったりするんですけど、仕方ないことなのかなあ、でもなにを一番大事にしてほしいのかなあと思うと、子供のためとか父親のためとか誰かのために生きるんじゃないって：あなたは死んでいくときに、ああよかったなあって思

えることが、おかあちゃんいくつあるの？って聞いたら、それはそれなりに楽しかったと思う人生だったかわからないけれど……。でも私は、人から包丁を突き付けられる状況に自分をもっていこうと思わないし、はさみで服を切られる状況にもっていきたくないし、フライパンの底の形が変わるぐらいに殴られるような人間関係はつくりたくない。

それから、妹のように、明らかに私より力がないものが、うんと力をもっている者に暴力などおどされたときに、それは守っていきたくないと思います。そこらへんのところ、母親はどんなふうに考えているのかな。もし妹の傷ついた心の内面というものを、もっと真剣に受け止めていたら、状況は変わっていたんじゃないのかなと思うんですね。親から子供が受ける家庭内暴力ということについて、母親の家出から一年ぐらいたったときに、姉妹というかたちでなくて妹と話し合ったことがあるんです。改めて聞いてみると、妹は包丁を突き付けられてものすごくこわかったと言いました。また、家出していった母親が戻ってきて父

と別居するときに、もう一軒の家に妹がかわいがっていた猫を連れていき、新しい環境でその猫が、近所の猫にいじめられるということがあったのですが、ちょうど母親がもういっぺん父親とやり直すという時期で、妹に「おとうちゃんのところに戻って、包丁を突き付けたような人とやっていくの？」と聞いたときに、「私は猫のことがあるから」とその時にそれだけ言ったんですね。

それからまた一年ぐらいたって猫の話聞いたときに、どういふふうに妹が言ったかという、「包丁を突き付けられたときに、だれも大人がかばってくれなかったけれども、私はそういうことをしたくなかったから、たとえ猫でも近所でいじめられているのを見るのがいやだったから、父親のところに戻ってもいいなあと思った」と言ったんです。私は直接父親から包丁を突きつけられたことはないから、やっぱり私は他者なんです。かわいそうに、そんなことをされて、と思うんだけど、そのときの恐怖とか、いやだったこととか、なんで守ってくれないのというのを、どこに訴えていっても、

「あんたのところのおとうちゃんには、追いつめられていたんだよね」とすり替えられていくことの悔しさは、私よりも、母親が家出をした家にいた妹が感じたことだと思っています。それが妹のところに一番きつい形でやってきていたんだらうと想像できるのは、妹が一番力をもっていないからなんですよね。

伝えてほしい親の意志

これからどういふふうに、家族というものをとらえ直していったらいいのか私にはよくわからないんですが、とりあえず、白いものは白というような環境をもっていきたいと思う。父親と母親は私が望むように離婚をしなかったけれども、父親と母親が離婚をしなかったって、老後をみるかみないかは、私が選択すればいいことだと思っています。

これからシングルで生きていくなかで、自分が感じたり笑ったりということを大切にしていきたい。母親のことは、前のようにカッとなつて受け止めたり、突き放したりすることは多分しないだろうけれど、何か頼ってきたいことがあるたら、私にしてほしいのかというのを母親に聞きたい。これっ

ですごく大事だと思うんですね。

母親の家出の騒動に巻き込まれて思ったんですけど、私の母親は自分がどうしたいのかということが見えていないんです。私は何をどうしたいかというのが見えていたら、歩みだす一歩だってもっと自分で責任をもつと思うけれども、責任を放棄しておいて頼って来るところがあるので、できるだけ母親にはなにをどうしたいかを勉強してもらって、これからの家族という関係を続けていきたいと思っています。

一度離婚騒動はあったんですが、それでも書類のうえではずっと結婚しているという家族なものですから、これからのこともないことが起こるかわかりませんが、大事なものは、子供の立場から言えば、両親が離婚するしないの意志というのを、的確に伝えてほしいと思うんです。自分がどういふふうにいるのかということ伝えるということが、結果がどうであれ、それが一番通じていくことだと思います。



ハンド・イン・ハンドは、みなさんがつくる雑誌です。

みなさんの日常考えていることや、生活の匂いが伝わってくるような、そんなハンド・イン・ハンドでありたいと思います。お便りをどんどんお寄せください

■東京都

「S・Y

今回初めて合宿に参加させていただきました。いつも、今度こそは、と思っていたのですが、仕事の都合で出席できなかったのですが、合宿に対する期待は大きかったのですが、私が得たものはそれ以上に大きく、とても収穫のある合宿でした。

事務所の方々、ボランティアのみなさま、本当にごろうさまでした。また、あの性教育の話から、「生きているってスゴイ！」って子供に感じさせるなんて、本当に感心させられました。ちなみに、すぐにへその緒を見たがったので、見せてあげると首をかしげていました。合宿から帰ったら、おとうさんがいないことを、よりスムーズに話せるようになり、とても良い方向に向かっていきます。

別居中、調停中、離婚後何年と、みんな立場は違ったけれど、合宿後の顔の何と晴れやかだったこと。

どなたかが言った「結婚するのは

簡単だけれど、離婚するのは本当に難しい」という言葉がとても印象的でした。

また春の合宿にぜひ参加したいと思っています。

■埼玉県

「M・F

同居期間より別居期間が倍以上になってしまったのですが、三度の調停もうまくいかず（相手の転勤やよく理解できない言動のため）いつかは相手から言ってくるさと開き直っていました。つい先ごろ、調停を取り下げて九か月目に、相手から申し立てたようで、家裁の調停官から連絡がありました。これからまた、一騒動ありそうです。が、私はもう離婚を急ぐ気もないので、相手の出方をみようと思っています。

いやらしいかも知れませんが、この二年、私を振り回した相手への復しゅう戦だと思っています。

戸籍を見るとゾッとしますが、自分でしてかしたことです。紙の上のものだと割り切っています。けれど、姓を変えるのはもうたくさん（私は生まれてから四回姓が変わったらしいので）。離婚は勉強になりましたが、結婚についてはこれからの課題ですね。

今は、私は結婚というものに向いていない、という気持ちでいっばい。一年足らずの生活で何を言うかと言われそうですが、甘い生活というのも経験したかったですね。

母子家庭というのは、健康が大きな資本だなあと感じる今日このごろなのです。

■神奈川県

「M・I

老後のアンケートに答えていて感じたのですが、自分は老後に限らず、現在も十分に孤独なのです。時々言いようのない寂しさに襲われますが、それを癒す術もなく、つい子供に当たったり悲観的になったりしています。どうしてこんなに寂しく孤独かというと、人を信じられなくなっているからです。離婚してからいろいろな人と出

会いました。でも心から通じ合える人は一人もいません。昔からの友人は、私が離婚してからは電話すらかけてこなくなりました。私が誠心誠意つきあっても、相手はいつの間にか遠ざかっていくのです。離婚したら友達をたくさん作ろう、そして家と呼んで楽しく過ごそう、ずっとそう願っていたのに、ふたをあけてみたらただ独り相撲だったわけです。

思い起こせば離婚後、最初に大きな裏切り、失望を経験しました。実の母が、私にも息子にもひどい仕打ちをするのです。こんなとき、実の親だけは私と子供の辛さ、苦しさを痛々しく思っ、温かく接してくれるものと期待していた自分が情けなくなりました。親にしてこうなのだから、他人ならなおさらかもしれません。

今年の三月、親の家から離れて子供と新しい生活を始めました。本当の自立の生活が始まったのです。しかし友達とはそれを機に音信が途絶えがちになり、こちらから連絡してもなぜかそっけない態度。近ごろではもうあきらめて、割り切るようにしています。しょせん生きるってことは寂しいことな

のだと。

離婚したことを明るく話す私に、いかにも同調したようにうなずき答えていた人々。彼らは腹の中では私を哀れんでいたのでしょうか。結婚生活で裏切られ、精神的にも肉体的にも傷めつけられ、ぼろぼろになってやっと離婚したのに、それでも離婚は不幸なことと受け止めているようです。

現在私は看護学校に通っていますが、個人面接で教務の女性教員からひどいことを言われました。「なぜ子供がいるのに離婚したのか、なぜ実家を離れたのか。親が実の子につらく当たるわけがない。あなたの思い過ごしか、わがままにすぎない」と。私はその人の顔を、幸せな人だなあと思いながら、じっと見ていただけです。(中略)今はただ、結婚していたときのような暴力を受けないだけでも平穏で幸せな生活と思って暮らしていこうと考えています。



■神奈川県

N・H

一〇〇号の千葉県の名無しさんへ。年齢、離婚後の年数がにているためか、あなたのメッセージ、本当に同感しました(再婚について)。あなたのおっしゃるような、単に現実の状況(相手の)のこともありませんが、それでも年齢の差だろうと何だろうと、逆に苦労をなめた経験のある自分なので、問題は、相手の方が共に励ましあい、支え合っているかどうかの問題という気がします。

根本的には、私達は人間性によって支えられ、またふみにじられてきたのではないのでしょうか。それでもつくづく感じるのは、男性や結婚を目のあたりにしたときに、その人柄がもう見えてしまうような感じ。そういう意味で、「なるほど、結婚していい理由が納得できる」と感じる人が多いのです。こんなごう慢なことや偉そうなことを言える自分ではないのですが、率直にそういう印象をもつことが多くて、よくも悪くも目が肥えてしまった感じです。再度の幸福を思えば思うほど、厳しく冷静に見てしまうのは、離婚の功罪な

のかしら、と思います。できるだけ素直に柔軟に目を向けていかなければ、と思うのですけれどね。

■千葉県

M・H

世の中にいろんな差別があるけれど、父子家庭より母子家庭のほうが、経済的なこと、女性を見る目など、どうしても厳しいのが現実で、差別は依然として世の中にまかり通っています。そんな目に負けず、自分を尚いっそうきたえて、強く又柔らかな感性で、生きていきたいと思っています。スウェーデンでは、もう人口の八五%が親が二人そろわない、又は籍が入っていない家庭だと聞きました。日本はまだまだ未開発国。

新米ですが皆様よろしく。三歳の男の子のいる母です。異性である男の子なりの悩みがこれからますますありそうです。男の子供をもつ母の会なんてどうでしょうか。子供にも母にも仲間が必要です。母子を守る社会的法律などいろいろなことを話し合ったり教え合ったりしたいです。

■愛知県

R・K(二九歳)

私の場合、離婚した人達の中では恵まれた環境にいると思います。私が一人っ子であったため、だれの遠慮もなく実家に戻れ、父も母も子供のことを何よりも大事にしてくれるからです。子供の父親になりきれなかった彼以上に、父親の役目をしてくれる私の父に感謝しています。

でも将来のことを考えるとやっぱり不安です。子供がせめて三歳になるまではという両親の願いもあり、今は家にいます。経済的自立ができない自分に対し、もどかしさを感じ、子供と二人きりになったら、果たして私がこの子を守ってやれるのかということが頭に浮かびます。そして、社会に出たとき、何の特技もないのにどんな職業に就けるのか心配でなりません。

子供は、やはり父親がいなくて、学校へ行ってから引け目を感じることはあるのではと、小さなことでも気になります。



■東京都

Y・M

はじめまして。私は離婚して三年目の二十七歳、四歳の女の子の母親です。娘は当時、一歳八か月でした。

離婚当時は、夫のお給料と同額ないとかやしいとか、専業主婦でもなにかつかめるなんて、今考えるとつまらないことに意地をはり、本職の保母のほかに在宅でテストの添削、原稿の清書、テレホンオペレーターなど、ほぼ同時進行で二年間がんばりました。

娘の二歳の誕生日には、プレゼントやパーティーを豪華にしてあげたくて二週間だけ決死の覚悟で、スナックでバイトをしたりもしました。でもそんなことはどうでもいいことだと気が付き、「一人で立派に育てる」という意気込みもすれ、二人でガツガツと生活するよりも、私の親と暮らし、家族を作ったあげること大切だと考え直しました。そして、離婚当時は実家に入れてくれなかったほどのがんこ者の母と話し合い、念願がなつて今年の四月から三人で暮らし始めました。親せきもでき、家族のきずなで本当にありがた

い、と思うようになってきました。

引越して、今までのバイトにさよならをして、もう一歩夢に近づいたために、タウン誌のレポーターを始めました。原稿を書いたり、イラストを入れたり、本職のストレスも吹っ飛ばすほど楽しいバイトです。保母のほうも、主任としてがんばっています。

娘は四歳になり、五月から保育園に入りました。今まで私の勤める保育園に連れて行き、アグネスちゃんも真っ青の子育てをしてきました。勤務は病院の託児所なので、夜勤も二四時間勤務も娘と二人で乗り越えました。だんだん大きくなって、私のそばでやきもちをやって過ごすより、保育園で友達と健全に触れ合ってほしくて手放しました。病気のときなどは、子連れで仕事をしていて、まだまだ子供中心の生活です。

ほかの方から見れば、恵まれてるように見えるかもしれませんが、すべて自分から自分を売り込み、実績をあげて、やっと手に入れた、絶対に放しがつく、次のステップとするためです。子供の手が離れたら、一歩前進してやりがいも大きくしていきたいので、今は

いろいろと勉強中です。



■神奈川県

一〇〇号のアンケートをみて、入会している方のなかで、別居中の方が意外に多かったのが本当に心強くうれしく思いました。

私も夫の女性関係が原因で別居して三年余。夏休み、お正月などのお休みには、私一人で（子供の）相手をして、夫は女性と楽しんでいる。割に合わない話と聞いても、持病と子供への愛情から今に至ってしまいました。

私は三四歳、子供は小学校四年の男子です。これから特に難しい時期なので、同じように別居中という立場にある方、ぜひお互い励まし合い、時には遊び合う友達になって頂けたら幸せに存じます。連絡を心より待っています。

インフォメーション

☆新入会員の方々にアンケートをお願いしていますが、要にびっしり質問や相談事を書いてこられる方がよくいます。ひとつひとつになかなかお返事ができなくて申し訳なく思っています。

随時、弁護士一〇番等でありあげていくつもりですのでお待ちください。また、お急ぎの方は、離婚一〇番をご利用くださいますように。

☆十月十日、仙台で円より子が講演します。一時から仙台一四一館で。仙台周辺の方々とハンドの会を持てるといいですね。

☆家計簿公開に応じてくださる方、お知らせください。

また、先号でも募集した、元気印の女たちへのインタビュも始まります。離婚をどう乗りきったか、再就職は、子供たちとのつきあいはなどなど、ユニークで楽しい母子家庭の様子をぜひ聞かせてください。



Q

夫から、度々離婚を迫られて困っています。夫の不貞が原因で、夫の方から離婚調停が出ましたが、不調になったので夫が家を出ました。その後、私の方から婚姻費用の分担の調停を申し立て、成立しました。下の子が今年小学生に入学すると同時に、私もパートで働き始めました。やっと生活が落ち着いてきた矢先、二度目の離婚調停を夫が出しました。私は、私の方の条件を夫がのむなら離婚しても良いと思いますが、だめなら今のままの状態を希望します。調停に出ると、夫の出している条件で説得されてしまいそうです。どうしても調停には出なければいけないのでしょうか。

A

調停は、裁判所が関与して、当事者双方の話し合いの手助けをし、合意が成立すれば、その合意に執行力をもたせる制度で、当事者の話し合いを基本にします。家事審判法では、呼び出しを受けた事件の関係者が正当な理由がなく出頭しないときは、五万円以下の過料の制裁を

弁護士 110 番

規定して出頭義務を定めていますが、実際には欠席したからといって過料の制裁を受けたということは寡聞にして知りません。しかし、出頭が市民の義務であることはかわりなく、また、せっかく専門家が相談に応じてくれるのですし、夫君も話し合いを希望して調停を出されているのですから、出頭するぐらいはしてあなたの気持ちをおわかってもらうように努力されるべきではないでしょうか。別居の原因が夫君の不貞であるにしろ、話しあいさえ拒否するというのは、女を下げることになりますね。仮にあなたがずっと調停に欠席すれば、夫君としては有責配偶者との非難を覚悟の上で離婚訴訟を提起する可能性があります。裁判所が有責配偶者の離婚請求を認めるには、いろんな枠がありますが、最近和解を期待することもあって、比較的容易に離婚訴訟を出す傾向がありますので、あまり侮らないことです。

〇六―三六五―一六八〇

弁護士 竹川幸子

☆カウンセリング研修会

毎土曜日の離婚一〇番でボランティアをしてくださるカウンセラーが足りません。研修会で養成につとめているのですが……。

あなたも自分の体験を活かし、しっかりした訓練を受けて、カウンセラーになってみませんか。

十月十一日(水)～二月十四日(水)までの全八回。一万五千元。午後六時～八時。飯田橋駅隣センラルプラザ十五階。申し込みは〇三―四〇二―七三五四星野まで。

☆東京の会について

この頃、出席率が大変悪く、以前は坐りきれなかったほど盛況だった頃と隔世の感があります。みんな、自分なりのネットワークを持つようになって、ハンドの会で友人を作ったりする必要がなくなってきたりしたのかな。六月など私(円より子)を含め、集まったのは世話役だけ。しばらく、畑中さんのお宅で会報の発送をしながらのおしゃべり会だけとして、再スタートの案を練っています。ご意見お寄せください。

■事務局便り■

☆一番頼りにしたいのは自分です。そうなる自分を願いながら離婚一〇番などのお手伝いをさせてもらっています。(瀬下)

☆大臣も女性問題で辞任し、古い法律も変わってゆくことと思います。何事もあきらめず頑張りたいですね。(浅野)

☆楽しかった夏合宿も終わり、秋には養護施設での実習を控えて今から緊張しています。(星野)

☆転職して四ヶ月、自分のペースを守りつつ、存在感に手応えあり、出会いは楽しいナァ。(児玉)

☆養育費も払わなければ、子供に会いたいともいわない父親が多い中で、最近子供をひきとったり、別れてもしっかり行き来をする父親が増えてきています。先日会った人は、毎日曜日、小四の娘さんと過ごしていました。徹夜で仕事を片づけてでも会いにいくのが自分の生活のリズムになっっているとか。(円)



情報文化センター（住友中之島ビル5F）参加費は千円。
第一第三土曜日はハンドの例会。竹川事務所にて。午前十時半。

第一〇〇回ニコニコ離婚講座

十月二十八日（土）一時半～五時。千駄ヶ谷社会教育館3F（☎〇三三四九七〇六三三）。参加費は千五百円。金住典子弁護士による「離婚の法律」。希望者は電話で予約を。一一一回は十一月二十五日（土）。

☎〇三三四〇二一七三五四

会合のお知らせ

★東京の会合

十月二十九日（日）午後一時から。さん宅で毎月最終日曜日の午後、ハンドの発送をしながら、おしゃべり会をします。どうぞご参加下さい。★

駅から徒歩十二～三分。当日駅からT.E.L.下されば道順教えます。
★大阪のニコニコ離婚講座

十月六日（金）一時半。大阪府

離婚制度研究会のお知らせ

第七回の研究会を十月五日（木）、午後六時半～八時半。千駄ヶ谷社会教育会館2F（☎〇三三四九七一〇六三一）で開きます。講師は上智大学の石川稔先生。参加費は千円。希望者は電話で申し込みを。

☎〇三三四〇二一七三五四



●ハンド 求人案内●

「ニッセイ」（NISSAY）にあなたの自立をお手伝いさせていただけませんか？勇気をもって飛び込んでみましょう！！ぜひ一度新宿NSビルでの会社説明会に参加してみてください。詳細は御一報いただければ資料をご送付させていただきます。東京都新宿区西新宿二一四一

新宿NSビル6F

日本生命新宿NSビル支部

担当 小瀬、守屋 迄

☎（〇三）三四二一〇七三三四
お待ちしております。

☆離婚一〇番

〇三三四〇二一七三五四
〇三三四〇二一四三八五
電話相談は第一、第三土曜日が午後一時～四時。第二、第四、第五土曜日が午後七時～十時。

購読料について

現在つぎの三通りの方法をとらせていただいています。

- ① 一年間三〇〇〇円（送料共）
- ② 二年間まとめて前払いしてくださる方には、二年分、六〇〇〇円のところを五〇〇〇円に。
- ③ 出世払いもしくは免除

どうしても苦しい方は、いつでも遠慮なく申し出てください。それぞれ出費が多く大変でしょうが、期限切れの通知の入った方、またはこの折りにという方、いずれもご都合のよい方法でどうぞ。

（振込先）各地の郵便局にて振込用紙は無料でもらえます。
東京一四一四二〇五四二
ハンド・イン・ハンドの会